

第12回

～認知症ケアのヒントがここにあります～

ようざん 認知症ケア事例発表会





赤いティアテープを引くと DVD が簡単に取り出せます。

第12回

ようざん認知症介護事例発表会

今回の事例発表の際のスライドで使用される写真など個人情報につきましては、本人並びにご家族の同意とご了承を頂いております。事例発表は、本人とご家族、職員が一体になって取り組んでこそ大きな成果を得られるものです。本日の発表に向けて頂戴しました、ご家族の温かいご理解と深甚なご協力に対し心から感謝を申し上げます。大変ありがとうございました。

今回事例発表させて頂く 10 事例は、下記の 32 事例から選抜された優秀事例です。
ケアサポートセンターようざんのホームページにすべての事例を掲載しています。

「看取り」ご本人と家族の想いに寄り添うために・・・・・・・・・・グループホームようざん飯塚
「青葉茂れる桜井の・・・」～最期まで歌うことの意味～・・・・・・・・・・特別養護老人ホームアンダンテ
「ウチへ帰ります」～帰宅願望のある利用者様への対応～・・・・・・・・・・ショートステイようざん並榎
Best Design・・・・・・・・・・グラントツようざん
心に寄り添った食事の工夫～私たちにできること～・・・・・・・・・・グループホームようざん栗崎
「最後まで自分らしく暮らしたい」・・・・・・・・・・ナーシングホームようざん
施設での生活を通して～小さな環境が起こす変化、Aさんクロニクル～特別養護老人ホームモデラート
外国人技能実習生と共に・・・・・・・・・・ショートステイようざん
グループホームでの緩和ケア・ターミナルケア～家族に囲まれて旅立つ穏やかな看取り～

グループホームようざん

ありがとうを伝えたい～その笑顔が見たいから～・・・・・・・・・・特別養護老人ホームアダージオ
「ここに来られて、良かったんよ♪～A様らしく、私達に出来る支援とは～」

グループホームようざん倉賀野

「当たり前前の生活を当たり前」・・・・・・・・・・グループホームようざん八幡原
「あなたの趣味は何ですか?」・・・・・・・・・・ケアサポートセンターようざん大類
変わりゆく身体状況とそのニーズに対する柔軟支援・・・・・・・・・・ケアサポートセンターようざん石原
利用困難とされた利用者を受け入れた取り組みについて・・・・・・・・・・ケアサポートセンターようざん小鳩
息子想いのセンターアイドル・・・・・・・・・・ケアサポートセンターようざん貝沢
「生きる」という事・・・・・・・・・・居宅介護支援事業所ようざん
父と共に・・・・・・・・・・ケアサポートセンターようざん藤塚
『命ある限り付き合ひましょう』～家族の絆～・・・・・・・・・・ケアサポートセンターようざん飯塚
ここが第二の我が家のように・・・・・・・・・・ケアサポートセンターようざん中居
当たり前前の場所から唯一無二な場所へ・・・・・・・・・・ケアサポートセンターようざん並榎
安心して暮らせる環境を～お金がないからいいよ～・・・・・・・・・・ケアサポートセンターようざん
「縁起でもない話を、もっと身近に」～もしものための、話し合い～ケアサポートセンターようざん双葉
今が一番幸せ・・・・・・・・・・ケアサポートセンターようざん栗崎
お風呂だけでも入れて貰えれば・・・・・・・・・・ケアサポートセンターようざん倉賀野
笑顔で100歳を迎えたい・・・・・・・・・・スーパーデイようざん双葉
『お風呂なんて嫌!!』～諦めず、可能性を信じて～・・・・・・・・・・デイサービスようざん並榎
「一人は寂しいよ・・・」～安心できる場所を求めて～・・・・・・・・・・スーパーデイようざん栗崎
「もう帰っていいんかね?早く帰りたいよ」・・・・・・・・・・スーパーデイようざん貝沢
その人らしさを活かしたケア・・・・・・・・・・スーパーデイようざん小鳩
「どこに行くのか分からないけど、まあいっか!」・・・・・・・・・・スーパーデイようざん石原
『笑顔のさきに……』・・・・・・・・・・デイサービス ぽから

目次

「生きる」という事（自己決定・人生の最期）

居宅介護支援事業所ようざん 中條留美子 P.1

青葉茂れる桜井の・・・～最期まで歌うことの意味～（看取り・BPSD）

特別養護老人ホーム アンダンテ 馬場みずほ P.4

外国人技能実習生と共に（外国人技能実習生・ベトナム・評判）

ショートステイようざん 福元俊仁 P.7

縁起でもない話をもっと身近に～もしものための話し合い～（ACP・人生の最期・もしバナゲーム）

ケアサポートセンターようざん双葉 道下未南美 P.12

当たり前の生活を当たり前（新型コロナウイルス・ピック病・BPSD）

グループホームようざん八幡原 福島佳枝 P.16

一人は寂しいよ・・・～安心できる場所を求めて～（個別対応・利用拒否・BPSD）

スーパーデイようざん栗崎 渡辺恵美 P.19

どこに行くのか分からないけど、まあいっか！（独居・介護拒否・BPSD）

スーパーデイようざん石原 石井洋子 P.23

安心して暮らせる環境を～お金がないからいいよ～（地域の協力・独居・BPSD）

ケアサポートセンターようざん 塚越涼介 P.27

「看取り」ご本人と家族の想いに寄り添うために（看取り・重度化対応・家族）

グループホームようざん飯塚 木下 圭太 P.30

最後まで自分らしく暮らしたい（外国人介護職・生きがい・山登り）

ナーシングホームようざん 木村リア・パディリア P.34

※各事例の QR コードを読み込むと、動画が再生されます。



「生きる」という事

居宅介護支援事業所ようざん

中條留美子

私は居宅ケアマネとして業務に就き、2年ほど経過しました。
この短い期間ですが、自分の人生についてどのような最後を迎えるべきか、考えるきっかけを与えてくれた利用者様がありました。

忘れることが出来ない利用者様です。

是非皆様にも人生を生き抜くことについて、少しでも考えていただく事が出来たらとの思いと、短い時間でしたがこの利用者様と関わったことで、自分自身の生き方についても考える時間を与えてくださった事のお礼も込めて、今回の事例発表をさせて頂く事にしました。

S・Kさん 75歳 女性の方です。

生まれつき両股関節に障害があり、結婚はせず定年まで事務職として立派に勤め上げました。休日には旅行に出かけ、趣味の俳句作りや読書、庭の手入れ等色々楽しみながら自分なりの生活スタイルを作り上げていました。

しかし、定年と同時に病気が発覚、乳がんでした。まだまだこれから楽しみも増えるとワクワクしていた時だったと聞きました。

乳がんが治るのならばと踏み切った手術だったそうですが、不運にも肺に転移していることがわかり、今度は肺の治療が開始されました。

体重も減り体力も低下し、楽しいはずの定年後の生活が治療で10年以上も辛い日々が変わってしまい、本当に辛かったと聞いています。

治療の副作用で骨ももろくなり、圧迫骨折を起こした事を機に介護保険の介入となりました。

痛みで掃除が出来ないとこの事でしたが、あれもこれもしてもらおうという事ではなく、最小限の支援を受ければ良いと言う考えの方でした。

生活の全てを自分で出来ていた人ですので初めはヘルパーさんに掃除をしてもらうことに戸惑いがあったそうですが、直ぐに打ち解け、お互い仕事だと割り切ることで気兼ねなく気持ちも楽になったそうです。

骨折が改善してからも抗がん剤治療は続いていましたが、状態が良くなることはなく、受診の度に違う薬を勧められたと落ち込んでいらっしやいました。

その頃には既に治療は苦痛に変わり、自分でも「余生は好きなように生活したい。今まで行きたい所へたくさん旅行にもいけたし、思い残すことはない。

家に居て花を眺めている時が一番幸せ。これ以上辛い治療をして今の生活が出来なくなる事のほうがかもつと嫌だ・・・」と訴えることが多くなっていました。

そんな時に主治医から「もう春まで持たない。次の受診までにホスピスを決めて来るように。」と言われたと、Sさんはすぐに私に相談に来てくれました。

今にも命が終わってしまうのではないかと言うような不安な表情で・・・。

Sさんは「病院のベッドで壁を見ながら死んでいくのは嫌だ。動けなくても自分の家で死んで行きたい。」とはっきり言われました。

「どうしても最後は病院へ行かなくてはいけないのか？」とも言われ、咄嗟に私の口からは「家で最後まで居られます。協力させてください。」という言葉が出ていました。

何とかSさんの強い意志と、気持ちを汲み取ってあげたいが故に出た言葉です。

直ぐに介護申請を行うと共に病院の相談員を通して、治療はせずにこのまま自宅で過ごしたいと強い希望があることを医師へ伝えていただき、在宅へ切り替えることになりました。介護保険からはベッドのレンタルと今まで通りに訪問介護を利用し、医療保険では訪問看護の利用という事になりました。

全ての支援が整い、病院へ行かなくてよくなった時のSさんのホッとした安堵の表情が忘れられません。

それからの日々は、本当に生き生きと花の手入れをして俳句を作り、毎晩晩酌を楽しみ読書しながら休むという生活を楽しんでいました。通院していたときよりも、エネルギーがみなぎっている様にも感じられました。

春が過ぎ夏が過ぎた頃から、病気の進行と共に酸素吸入が必要になっても、同級生や近所の方の訪問が嬉しそうでした。

私が訪問するたびに「今の暮らしが一番幸せ」と言ってくれました。受診をしなくなった頃からでしょうか、身辺整理も徐々に進めていたようで、甥御さんには自宅の不用品の片付けを依頼した事や、戒名を決めた事、最後に着る衣装の保管場所や遺影の写真まで決めてある事を教えて下さいました。全てを受け止めいつも穏やかな表情で過ごされており、私まですっきりした気持ちを共有していたように思います。

その日は突然訪れました。

朝から体調が悪いと看護師からの報告は受けていましたが、その日の夜に旅立ってしまいました。75歳という若さでした。

兄嫁が付き添ってはいましたが、ちょっと傍を離れた間に息絶えたようです。

最後まで1人で迷惑をかけないようにと言っていた、その通りの旅だちでした。その微笑を感じる表情は本当に満足そうでもありました。

病気を受け入れ納得し、人生の最後のあり方を決めてからも表面にはみえない苦悩や葛藤はあったはずですが、誰にも弱音を漏らすことなく本当に強い方でした。

ケアマネは本人の意思に基づいて、不足している部分を補うことで、その人の生活が向上し生きる意欲に繋がる支援をする立場と考えています。

そのための介護サービスも与えるものではなく、本人と一緒に考え最良の支援が提供できてこそそのものと考えます。

Sさんも、「こんな良いサービスが受けられるとは思ってもいなかった。」といつも言って下さっていました。

でもそれはSさんが自分らしく最後まで生きていと望んだ上での支援です。

必要なサービスを必要な時に使う。決して無駄なサービスは有りませんでした。

私たちは、残り少ない人生の一部分に関わらせていただく、とても貴重な仕事をさせて頂いています。

だからこそ、その人がどのような生活を望み、そのためには何が必要なのか見極めながら対応していかなければなりません。

最後に、これはSさんから頂いた自作の句集の中に、第三の世界での暮らしを楽しみにしていると言われ思い描いた句があったので紹介させていただきます。

花の夜の明日香の空に舞い遊ぶ

月の夜は雲の上にて酒宴かな

Sさん、毎日楽しく過ごせていますか？

あなたの生き様は決して忘れません。ありがとうございました。

ご静聴ありがとうございました。



「青葉茂れる桜井の・・・」

～最期まで歌うことの意味～

特別養護老人ホーム アンダンテ

馬場みずほ

唐澤 一樹

【はじめに】

皆様は「桜井の別れ」という歌をご存知でしょうか。鎌倉時代の名武将、楠木正成が迫り来る軍勢に死を覚悟し、息子に今生の別れを告げた歌とされています。笑顔が可愛らしく、おしゃべりで寂しがりやのA様。認知機能、身体機能の低下と共に、「桜井の別れ」の最初のフレーズ、「青葉茂れる桜井の」と、苦しくても、食事をしながらも歌うことに固執し、97歳で亡くなる直前まで「歌いたい」と言ったA様との関わりを通して、人生の最期まで私達職員が教えていただいた事例を発表します。

【利用者様紹介】

氏名:A様 女性 要介護度4

年齢:97歳

既往歴:左乳癌(高崎総合医療センターにて摘出手術)

左大腿骨転子部骨折

左心室肥大

高血圧

【A様の変化】

A様は平成28年11月、老人保健施設より特別養護老人ホームアンダンテに入居されました。入居した頃は、「ちょっと！」と職員に呼びかけ「どうかしましたか？」とお聞きすると「困った！」「何が困ったのですか？」「何が困ったのかわからない。」という、寂しさからと思われるような様子が見られていたため、職員はA様のそばを通るときは必ず声をかけたり、しりとりなど一緒に楽しみました。特に歌のレクが好きで、慰問のときなど大きな声で楽しそうに歌われていました。しかし、平成31年1月頃から休むことなく一人で大きな声で歌うことが多くなり、周りの入居者の方から「うるさい」と苦情が出るようになりました。A様の大きな声に誘発されて、同じテーブルのB様も大声を出しながらテーブルを叩くなど、ユニットが騒然となってしまいます。それでも歌を止めることはなく、徐々に怒鳴るように歌うようになっていきました。

【課題】

A様はなぜ休むことなく歌うのでしょうか。歌を楽しんでいるとは思えません。

歌う意味は何なのでしょう。

【検討内容】

- ① 同じテーブルの B 様に対して、言葉では言えない不快な感情を表現しているのではないのでしょうか。
- ② 歌いたい気持ちを尊重し、思い切り歌える時間を作ってみました。

【取り組み】

- ① B 様とは別のテーブルに席を移動し、視線が合わないようにしました。
- ② おやつ時間の後、歌のレクを 1 時間ほど行い、A 様には思いきり歌っていただきました。

【結果】

- ① 視線が合わなくとも怒鳴るような歌が聞こえることにより、B 様だけでなく、他の入居者様も落ち着かなくなっていました。
- ② 歌のレクが終わるやいなや、「苦しい！」と言いながらも歌い続けてしまう様子が見られました。

【再検討後の取り組み】

- ① 1 曲終わる度に水分を摂っていただきながら、生まれ育った故郷の話をし、会話の時間を増やしてみました。
- ② 歌以外のレクにも参加していただくようにしました。

【結果】

- ① 自宅の近くの橋の話をすると「そう！その橋！」「今度お茶でも飲みに寄って」と目をキラキラさせて話をして下さいました。
- ② 手作りおやつレクには楽しんで参加されていました。

しかし、効果は一時しのぎで、令和元年 7 月頃には食事の最中でも口に入れた食べ物を慌てて飲み込んで歌い出すようになってしまい、誤嚥の危険もあり、目が離せない状況となっていました。

令和 2 年 1 月、ホールでずっと歌っているため、声が枯れてしまいます。食事にも集中できないため介助が必要となりました。そんな中…。

【体調悪化】

令和 2 年 5 月上旬より 37℃ 台の微熱が続くようになったため、居室対応とし、ベッドで過ごすようになりました。食事、水分量も減っていく中で、それでも歌が止むことはありませんでした。

5 月 12 日、担当者会議の場で「痛みや苦しみながら最期を迎えたくはない。自然な形で穏やかに

迎えて欲しい。苦しまないで欲しい。」との家族の意向を伺いました。
新型コロナウイルス感染予防のため面会制限中でしたが、ご家族にはいつでも来て下さいとお伝えし、息子さんや娘さんが来られて短い親子の時間を過ごされました。
5月20日、食事も「いらない。」と首を振り、水分もスプーンで2口、3口がやっとになりました。
職員が「今一番やりたいことは何ですか？」とお聞きすると「歌いたい。」とはっきりとおっしゃり、居室からは細い声で歌が聞こえていました。
徐々に眠っている時間が多くなりましたが、28日、娘さんが面会に来られると、目を開けて安心されたような表情が見られました。帰り際「もう、頑張らなくてもいいんだよ。」そう、娘さんが伝えました。
6月1日、6:45分、ふくよかなお顔のままA様は永眠されました。午前3時に歌っていたのが確認されています。

【考察とまとめ】

当初は周囲を巻き込まず、A様に穏やかに歌っていただくことができました。しかし、命尽きる最後の刻まで必死に歌い続けるA様を見て、私たちの試みは職員側の横柄な考えであったのではなかったかと反省させられました。A様は歌うことでご自分を素直に表現し、自分らしく生きていたのではないのでしょうか。

私たちは入居者様のその行動に至るまでの心境を深く考え、肯定的に受け止め、その人らしさに共に向き合っていくことが大事であると教えられました。

『桜井の別れ』の歌は、「もうじきお別れだよ。」という、私達へのメッセージだったのかも知れません。A様の歌声は、あの優しい笑顔と共に私達の心にいつまでも残っています。

ご清聴ありがとうございました。



外国人技能実習生と共に

ショートステイようざん

福元俊仁

【はじめに】

ようざん栗崎エリアでは、2019年の4月から3名の外国人技能実習生を受け入れています。彼女たちは、母国のベトナムを離れ、一定期間(最長5年間)日本で働きます。その間、彼女たちが技能等の適正な習得・習熟ができるよう、技能実習に専念できる環境と体制を整える必要が、あります。今回の事例では、ショートステイようざんで働いている2名の外国人技能実習生の仕事ぶりや、利用者様とそのご家族様からの評価やご意見を紹介します。また、彼女たちにショートステイようざんで働いてよかったと思ってもらえるように、私たちが考えた取り組み内容を一部紹介させていただきます。

【外国人技能実習生の紹介】

氏名:TRAN NGUYET QUYEN チャン グェット クエン

年齢:25 歳

国籍: ベトナム

学歴:2012 年6月 B BINH LUC 高校 卒業

2015 年6月 PHU THO 医療短期大学 卒業

2017 年11月 TECHSIMEX センター 卒業

職歴:2017 年11月 介護士として高齢者施設に勤務

免許・資格:介護専門短期大学卒業証明書

N3 合格証

氏名:HUA NGOC YEN ファ ゴック イエン

年齢:25 歳

国籍: ベトナム

学歴:2012 年6月 NGUYEN VAN HUYEN 高校 卒業

2014 年9月 TUYEN QUANG 医療短期大学 卒業

2017 年11月 TECHSIMEX センター 卒業

職歴:2017 年11月 介護士として高齢者施設に勤務

免許・資格:N4 合格証

【技能実習生の受入準備】

1.受入態勢の整備

外国人技能実習生を受け入れる事業所には、以下の3役の選任が必須となります。

① 技能実習責任者

技能実習制度が円滑に且つ適正に実施できるよう管理監督を担う。労働関係法令全般に対する知識を有する者。

② 生活指導員

生活指導員は、現場において、実技を除く、技能実習生に係る全般(日常生活指導、賃金、労働時間その他)の管理を担う。

③ 技能実習指導員

技能実習生が習得する技能等について、5年以上の経験を有する者。技能実習生に関する基本的な知識(技能実習制度や技能実習生特有の取り扱い等)を有していることが望ましい。

2.受け入れ準備

技能実習生の受け入れに際し、「住居」「生活に必要な備品」「通勤に必要な移動手段」「通信環境(Wi-Fi)」などを準備します。

生活相談員は、近隣とのトラブルを防ぐため、ごみ捨てのルールや、寮社宅の周辺施設(スーパー、コンビニ、金融機関、交番、病院、緊急災害時の避難場所等)を案内します。

【受入後の管理】

技能実習中のはじめの1年間は、1か月に1回、管理団体(介護事業協同組合)から訪問指導があります。技能実習生の状況を確認し、適正な技能実習が実施されているかを確認します。また、同団体より3か月ごとに1回、適正に技能実習を行っているかについての監査を受けます。

技能実習日誌がしっかり作成されているか、労基法を遵守しているか、賃金等が適正であるかなど、「実習、勤怠、賃金関係」の状況確認のほか、お金の困っていないか、健康状態、精神状態は良いか、同僚とのトラブルはないか、継続的に日本語の勉強を行っているか等、生活全般のことも確認します。

【技能実習生の仕事の様子について】

技能実習生は、原則、指導担当の職員と一緒に仕事をします。ショートステイようざんでは、まずは日勤帯のホールの仕事を覚えていただき、その後、入浴介助、厨房業務という順番で仕事内容を増やしていきました。日本で技能実習が始まる以前から介護、看護の技術を習得しているため、日本の介護現場でもすぐに身体介護が実践できます。また、医療的な知識も習得しており、利用者の体調不良や怪我、皮膚トラブル等への適切な対応ができます。技能実習生の気づきにより利用者の体調変化を早期に発見できたケースもあり、医療的な知識や介護に対する意識の高さは、日本人スタッフが学ぶところでもあります。

【技能実習生への評価～利用者様、ご家族様からのご意見～】

私たちは、ご利用者のご家族様が外国人技能実習生のことをどのように思っているのか調査するためにアンケートを実施しました。回答内容の一部を以下に紹介します。

問 1 外国人技能実習生がショートステイようざんで働いていることをご存知でしたか？

回答結果： はい 6割 いいえ 4割

問 2 外国人技能実習生に関するエピソードがあればどんなことでも良いので教えてください。

回答結果(多数いただいたご意見の中から抜粋)

・母はようざんでの出来事、お世話になったこと、楽しかったことを自宅で大変たくさん話してくれ、外国人実習生のこともよく話題に出てきます。日本語がとても上手で、優しく親切で、とても可愛いらしいこと、そして祖国と離れながらも笑顔で頑張る健気を強く感じているようです。

・技能実習の試験のお手伝いに抜擢いただいた時には母も一生懸命で、自宅でもはりきっておりました。合格の報告をいただいた時には、家族共々、大喜び致しました！！

・家内を迎えに行き待っている時間に話をしたりしています。日本語がどんどん上手くなっていますね。明るい子で楽しいです。

・国籍は違っても他のスタッフさん同様に丁寧に対応していただき、有難かったです。

問 3 外国人技能実習生が日本で介護の仕事をする事について、どんな印象をお持ちですか？

回答結果(多数いただいたご意見の中から抜粋)

・人出不足の日本で、さまざまな障害がある中、頑張ろうという若い人達に感謝しています。せっかく日本を選んで来てくれたのですから、辛いことや理不尽な対応がないよう祈っています。

・高齢者に対する接し方が日本の若年層より礼儀正しと感じております。国によって違いがあるのだと思うのですが。

・日本語は難しいと思うので偉いなあと感心します。外国の方と接して、介護してもらい側も楽しいのではないかと思います。

・私も仕事で外国人の方はよく見かけますが、ベトナムの人はみんな一生懸命に働く人が多いように感じます。これからも多くの外国人を実習生として迎え入れたら良いと思います。

・コンビニエンスストア等でも、イエンさんクエンさんと同年代の外国の方が働いているのをよく見かけます。思わず心の中で応援してしまいます。

問 4 その他ご意見があればお願い致します。

・いつも安心安全に加え、あたたかく優しい環境を作ってください本当にありがとうございます。いつかイエンさんクエンさんとベトナムのお話もしてみたいです。シンチャオ！

【技能実習生の目標】

チャン グエット クエン

将来のため・・・

現在、日本にいる時間は一年間です。施設に勤める所はショートステイようざんという所です。こっちはみんな優しく、ねっしんで日本語を教えてください。だから、毎日楽しく働きを送っています。こっちにいろんな事勉強になりました。

帰国したら、日本の文化、日本人の優しい性格を教えたいと思います。日本語の教師になりたいです。日本語の教師の仕事は難しい仕事ですけど、毎日、毎日すこしずつ学んで、ある日出来ると思います。

そして、介護士として日本に行きたい人だけではなく介護の学びたい人に介護のぎじゅつも教えたいです。それは大変かもしれませんができるだけやりたいです。

ファ ゴック イエン

日本に来てから、もう1年半になりました。何時の間にか時間は流れてしまったようです。この間に、本当にいろいろ経験してきました。1年前の私は、まったく知らない異国にやってきて、生活を始めました。周りは、私にとってはすべて目新しいもので、日本ででの生活に早くなれなくてはならないと必死に日本語を勉強しました。目標は日本の介護士で認証を取得することです。そして日本語をしっかりと勉強してN2で合格する。

日本は世界で最も優れた国だということの理由を少しずつ分かってきました。長い間大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。

【技能実習生の課題】

外国人技能実習生にとって、今後の課題は「日本語の習得」だと言えます。日本語を理解する能力は身につけていきますが、利用者の様子を文章にして記録に残すということはまだ十分にできません。日本の介護施設では、ケア記録のほか、モニタリング、利用者のご家族様への報告、研修報告など、文章を書くという仕事が多くあります。少しずつ書くという経験を積み重ね、記録ができる日本語能力の習得を目指しています。

【技能実習生とともに働く私たちの目標】

外国人技能実習生に、ベトナムに帰っても、「最高の同僚が日本にいる」と言ってもらえるような職場作りを目指しています。また、日本の文化、風習などをたくさん知ってもらいたいという思いから、日々の会話のなかで日本らしい文化を紹介したり、休みの日には一緒に観光をしたり、レクリエーションでは四季折々の行事を体験してもらうことを意識しています。

【取り組み～交換日記～】

私たちは、外国人技能実習生と交換日記を始めることにしました。目的のひとつは、日本語で文章を書くという能力の習得です。もうひとつの目的は、彼女たちが日々感じていることや、仕事中は言いにくかったことなどを書いてもらうことで、より職員同士の交流を深めることです。実際に交換日記を始めると、はじめは想像以上に日本語で日記をつけるという事が難しく、仕事をしながら毎日書くのはとても大変なことでした。彼女達を書いた文章のなかで、文法や表現が間違っている箇所をみつけては訂正して、正しい書き方を教え、日々やり取りをしていきました。私たちが返事を書く、さらに返事を書いてくれたり、知らない言葉があると自分たちで調べて意味を理解していました。彼女達の日記の内容の中には、ケアで困ったことなどが書いてありました。その中で、彼女たちは私たちのことを「同僚」と呼んでくれていました。私たちを「一緒に働く仲間」として彼女達からみてもらえていることを嬉しく思い、また、「同僚」という表現に新鮮さも感じました。そして、交換日記を通じていろいろな思いも知ることができました。以前は自分の気持ちを私たちに伝えることが少なかったのですが、夜勤をしたいと思うが、記録を書くことができないからまだ無理だと思っていることなど、正直に話してくれるようになりました。交換日記を通じて、職員一人一人が真剣に彼女達に向き合っていることが伝わったのだと思います。今では、彼女達との会話が職場で多く飛び交います。時に、彼女達が変わった日本語の使い方をして、職員や利用者様が笑い、ホールが明るい雰囲気になる場面が多くなりました。

【まとめ】

外国人技能実習生と共に働くことに対して、初めは言葉の問題や習慣の違いなど不安がありました。実際に、こちらが言ったことに対して「はい。」と返事をする彼女たちに、「通じている」と思い込んでしまい、実際には伝わっていなかったこともありました。

また、利用者様からも、外国人という理由で私たち日本人職員とは違い見下す態度をとられてしまうこともありました。

しかし、どんな時でも彼女たちの熱心で前向きな姿勢は変わりませんでした。私たち職員も、全員で彼女たちに日本語、仕事内容、料理の仕方などを教えました。彼女達は利用者様への接し方がとても丁寧で、正しい介護技術を身につけています。利用者様もだんだんと彼女達を認め、信頼してくださるようになりました。彼女達と接していると、利用者様も、職員も、面会に来られるご家族様も、みんなが笑顔になっていきます。それは、彼女達がいつでも誰にでもピュアな心で接することができるからです。彼女たちの笑顔は本当に素晴らしいです。純粹で、人に安心感を与える笑顔です。私たち介護士は、普段、利用者様と接するときに笑顔を心がけていますが、彼女達から学んだことは、笑顔は心がけるのではなく、心から利用者様のことを想って接していれば、自然と笑顔が生まれるということです。

ショートステイようざんにお越しいただいた際には、皆さんも是非、クエンさん、イエンさんとお話してみてください。きっと優しい温かい気持ちになり、素敵な笑顔が生まれると思います。



「縁起でもない話を、もっと身近に」

～もしものための、話し合い～

ケアサポートセンターようざん双葉

道下 未南美

【はじめに】

近年、在宅支援の場においても当たり前となってきた「看取りケア」。

ケアサポートセンターようざん双葉でも、訪問看護・在宅医療と連携し看取り支援を行い、今年3月に事業所にてお看取りをさせていただきました。

人生の最後にどう在りたいか。

皆さんは自分の家族と「人生の最後」について話し合いをする事がありますか。

誰もが大切だと分かっています。でも、なんとなく「縁起でもないから」という理由で話しづらいと感じる方もいらっしゃると思います。

「縁起でもない」から避けるのではなく、「縁起でもない」事をもっと身近に。

看取りケアを通じ、誰もが「まだ先の事」ではなく、多くの方が早い段階から「人生の最後」について話し合いの場を持つことの大切さを感じました。今回の私たちの取り組みは、利用者様に対し、アドバンス・ケア・プランニングのきっかけとして効果を実感できただけでなく、私達自身の家族に対しても「人生の最後」について気軽に話し合えるきっかけを作ることができると実感することが出来ました。「もしもの時」の為の話し合いを、楽しく気軽に行う為の取り組みについてご紹介させていただきます。

【アンケート】

「人生の最後」について10名のご利用者様より、お話を伺いました。

利用者様への聞き取りは下記の通りとなりました。

1. ご自身の「人生の最後」についてお考えはありますか。

考えている・・・8名 特に考えてない・・・2名

考えていると答えた方の意見

- ・できるだけ家族に迷惑はかけたくない ・管につながれてまで生きたくない
- ・病院にお願いしたい ・家族がそばにいてほしい など

2. 家族と「人生の最後」について話をしますか？

話をする・・・3名 あまり話が出来ていない・・・7名

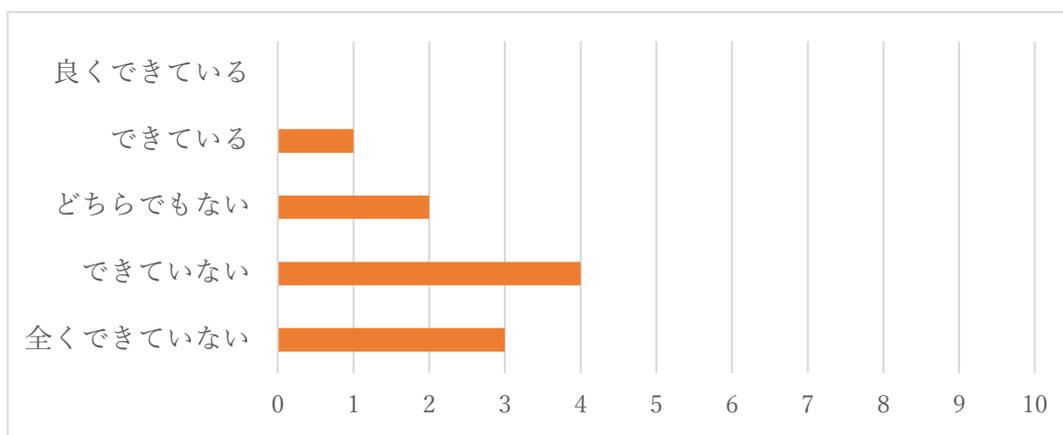
話が出来ていない方の意見

- ・何となく話しづらい。話すきっかけが難しい

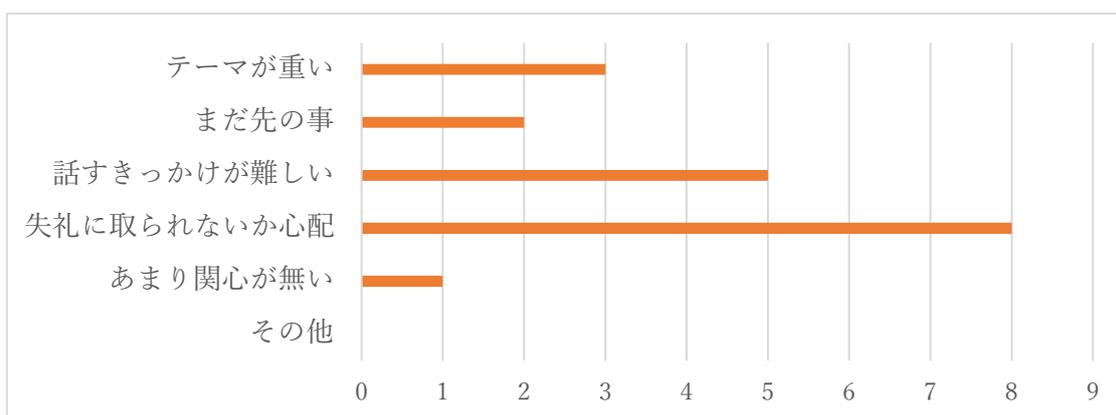
- ・向こうから聞いてきてくれると話しやすい
 - ・真剣に聞いてくれるか心配
- など

続いて今回聞き取りをした10名の利用者様のご家族を対象に、アンケートにご協力いただきました。アンケートの結果は以下の通りとなりました。

質問1. 「人生の最後」について、家族で話し合うことはありますか？



質問2. 家族間で「人生の最後」をテーマに話し合いがしづらい要因として考えられる事はどんな事でしょう。(複数回答可)



ご家族へのアンケートと利用者様への聞き取りの結果

「大事なこと」と分かっており「伝えておきたい」「知っておきたい」とそれぞれ気持ちはあるが、お互いに遠慮してコミュニケーションが取りづらい状況となっているような印象を受けました。

【もしバナゲームの提案】

今回の聞き取りに協力いただいた、利用者様とご家族へ「もしバナゲーム」を提案。

「もしバナゲーム」とは、「自分はどんなことを大切にして残りの時間を過ごしたいか」といった話を、利用者様やご家族、医療スタッフや私たち介護職員と、できるだけ気軽にかつ率直に話し合うきっかけになればとの思いから作られたカードゲームです。

このゲームを行うことで、

- ・相手が大切に考えている「価値観」が見えてきます
- ・自分の考えを整理する事ができます
- ・「人生の最後にどう在りたいか」をお互いに知ることができます

一度やるだけではなく、何回も繰り返し「その時」の価値観・考え方を共有していく事が大切です。

【もしバナゲームのやり方】

① カードは全部で 36 枚。

一人に 5 枚ずつカードを配ります。

次に、残りのカードを中央に積み、その周りに中央のカードから 5 枚のカードを表向きに置きます。

② 自分の順番が回ってきたら、手札の中から不要なカードを1枚、置かれたカードと交換していきます(なければパス)

③ 全員がパスをした時点で置かれた 5 枚のカードを流します。
積み札から新たに 5 枚のカードを表向きに置きます。

④ これを繰り返し、中央の積み札がなくなって、置くカードがなくなったらゲーム終了。

⑤ 各自が手元にある 5 枚のカードから、特に大切なカードを 3 枚選び、その理由を考え他の参加者に説明します。

◆職員でやってみました

職員間で聞かれた感想。

- ・利用者様の要望を知る一つのツールとして、かしまらずゲーム感覚で楽しみながらできるので良いと思う。
- ・いざ親とこういった話をしようとする正直しづらい。「まだ先の事だろ」と言われたこともある。これだったらゲーム感覚でできるので今度親とやってみたい。

◆利用者様とやってみました

テーマは重いですが、笑顔も見られ普段のレクと変わらない雰囲気で行うことができました。

実際にやって頂いた利用者様の感想

- ・大事なことですね
- ・手伝ってくれる人がいれば楽しくできる
- ・これだったら希望を伝えやすい
- ・家族でやってみたい

◆自分の親とやってみました

私自身「人生の最期」について、家族と話す機会が持てていませんが、「もしバナゲーム」を行うことで、変にかしこまることなくリラックスした雰囲気、初めて両親の考えや思いを聞くことが出来たとでも貴重な機会となりました。

【考察】

今回行った「もしバナゲーム」はアドバンス・ケア・プランニングのきっかけとして、とても有効だと感じました。

実際に職員同士、利用者様と、職員の家族と、利用者様とご家族とでやってみました。それぞれの場面で、お互いの価値観や考えを共有できる効果があると実感することが出来ました。

※アドバンス・ケア・プランニングとは？

将来の意思決定能力の低下に備えて、利用者様やそのご家族とケア全体の目標や具体的な支援や治療について話し合うプロセス(過程)のことです。

【おわりに】

アドバンス・ケア・プランニングは利用者様とご家族様と介護職員だけでなく、医療職員も含め双方が考える最善を達成するための一つのツールになり得るものです。

「人生の最期に、どう在りたいか」

人間誰しも心が変わることもあります。この話し合いは一度で終わりとはせず、折に触れて継続していく事が大切です。そのきっかけとして「もしバナゲーム」を活用していくことで、かしこまって構えることなくご本人の意思を尊重する支援の方向性が見えてくると実感しました。

今回の取り組みを通じ、「まだ先のこと」「縁起でもない」ではなく、人生の最後をもっと身近に気軽に話し合うきっかけとして活用していけると良いと感じました。



「当たり前の生活を当たり前」

グループホームようざん八幡原

福島佳枝

新井祐次

《はじめに》

私たちは、どれだけ利用者様の事を知っているのだろうか。入所される際に得た利用者様の情報は、実はほんの一握りであり誰よりもご本人様の事を知っているのは、ご家族様です。利用者様にとって当たり前の存在はご家族様なのです。私達の一握りの情報から行うケアよりも、ご家族の思いや協力が一番大切な時間だということを実感した事例を紹介させていただきます。

《利用者様紹介》

氏名:A様

年齢:73歳 女性

要介護度 3

既往歴:腰椎圧迫骨折 アルツハイマー型認知症 高血圧 骨粗鬆症 尿閉塞

《生活歴》

渋川市で4人兄弟の末っ子として生まれる。

結婚後、一女をもうけてしばらく東京で暮らしていたが、18年ほど前に現在の新町に移り住む。H30年5月ころより物忘れ等が出現。浴室やトイレの場所が分からなくなり、夕方以降は怒り出す事が多かった。渋川の実家に毎日電話を掛け、玄関から飛び出してしまう事もあった。興奮状態が収まらない時は旦那様が渋川の実家まで連れて行き、日に2回行くこともあった。症状悪化に伴い、デイサービスの利用を試みるがほとんど通う事はなかった。R1年8月に有料老人ホームに入居されたが、介護への拒否が強く、入浴も一度しかできなかった。少人数での生活の方が合っているのかもしれないと、旦那様の希望もありR1年10月入居となる。

《入居後の様子》

入所当時、渋川の実家と自宅への帰宅願望が非常に強く、繰り返し職員に尋ねる姿が多くみられました。旦那様はA様の現状を受け止める事ができず、面会はほとんどありませんでした。笑顔の素敵なA様でしたが、職員、他利用者様の言葉や行動が少しでも気に入らないと突如として怒り出し、手を叩き、床を踏み鳴らし「おバカちゃん。消えろ。」と怒りを露わにする姿が多く見られました。介護への拒否も強く、職員に対する暴言暴力も多くありました。携わっているうちにアルツハイマー型認知症とは違うのではないかと感じるようになり、A様の行動を考察すると、前頭側頭型認知症(ピック病)に見られる症状に当てはまるのではと考えました。

ピック病特有の症状が強くあり、声掛けしようとも拒否が強くトイレ介助もほとんど出来ず、1週間以

上更衣出来ない事も多くあり、一度も入浴することができませんでした。

夜間も放尿があり、トイレにご案内しても怒り出し排泄出来ない事や、他利用者様の居室に入り起こしてしまう事もありました。手を叩き、床を踏み鳴らし「殺してやる」と居室に戻れない時も多くありました。

なすすべもなく時は経つばかり。声を掛けるだけで怒り出し、衣服に触れるだけで嫌がって暴れてしまう。他利用者様への暴言暴力も改善されず、職員も疲弊してしまっていました。

ケアに限界が来ていた入所 3 か月目。専門病院へ内服薬の調整入院を勧めようかという段階まで来ていました。

「入院させるのは簡単なこと。だからこそ、もう少しみんなでケアしてみよう。」

所長の一声で、挫折しそうだった私たちは、力を合わせて頑張ってみようという気持ちになりました。職員一丸となって対策を模索している中、A様が唯一怒る事なく穏やかでいられる時間がありました。それは、旦那様との時間でした。旦那様と会話をしているA様は旦那様を気遣うごく普通の「妻」でした。そして、気づいたこと。

本物の旦那様に会っていただいた方が安心するのではないか…

《取り組み》

- ① 全職員でA様の訴えを全て受容する事、親切丁寧な声掛けとA様のペースに合わせていく事、絶対に無理強いしない事を徹底しました。
- ② 旦那様に現状を根気強く説明し理解してもらい、A様との面会をしていただきました。時には一緒に昼食を召し上がって頂き、夫婦の時間を作っていける環境を整えました。
- ③ A様は、男性職員を見ると全ての男性が旦那様に見えて【お父さん】と話しかけ、女性職員が【古くからの友人】に見え、「○○ちゃん」と話しかける事が多くありました。そこで、男性職員は【お父さん】として、友人として声を掛けられた女性職員は、【古くからの友人】になりきり、夫婦、友人としての会話を成立させました。
- ④ トイレ介助はA様の訴え時のみご案内する、怒り出してしまった時は無理強いせずにいったん離れ、A様が気持ちよく受け入れてくださる時まで何度も繰り返しました。
- ⑤ 洗髪の代替えとしてドライシャンプーの声掛けを毎日行いました。
- ⑥ 入浴の代替えとして、温かいタオルでの清拭と足浴の声掛けを毎日行いました。また、入浴も毎日お誘いし夕方もお誘いいつでも入浴できるように準備しました。
- ⑦ トイレ、脱衣場に常時着替えを用意しA様が希望された時にいつでも更衣ができるようにしました。
- ⑧ 内服調整は入院ではなく旦那様同行の下、通院にて内服調整行いました。
- ⑨ コロナウィルスによる面会制限時はベランダの窓越しに顔を見ながら電話をして頂きました。

《結果》

旦那様と会う時間を増やした事で、帰宅願望どころか確実に安心しているA様がいらっしゃいました。旦那様も日々表情が明るくなるA様を見て、多い時は週3回来てくださいました。職員も【お父さん】と【古くからの友人】ケアを繰り返しているうちに、1週間に一度くらいのペースでドライシャンプーが成功するようになってきました。更衣も毎日ではできませんでしたが、3日に一度は行えるようになりました。その時に清拭も行える事もありました。トイレ介助も怒りだす事も少なくなり、お手伝いさせて頂ける回数が格段に増えました。

所長の「入院ではなく、みんなでケアしよう」という言葉を聞いた時は正直、耳を疑いました。しかし、【お父さん】と【古くからの友人】になりきり、丁寧なケアを心掛け、旦那様との「時間」もあつたお陰で不穏になる事が日に日に少なくなっていき、その分A様から笑顔で「ありがとう」や「あなたがいてくれて本当に良かった」と言って頂けるようになり、達成感を得る事ができました。

そして、入所4か月経つたある日の夕方。A様の方から、「あ、お風呂に入りたいんですけど。」と、声を掛けて下さいました。夕方に入浴というのは、認知症になる前の生活において、いつもの事だったことがわかりました。旦那様との関りで心に大きな安心感が生まれたのだと思いました。

その後、続けて3度の入浴が成功し、順調にケアが良い方向に向いていた、ある日。

コロナウィルス感染予防の為、面会禁止。

面会禁止になり、ケアは振り出しに戻ってしまいました。2か月でBPSD悪化、食事量低下、ADL低下。ついには、食事量低下が原因でR2年7月、専門病院へ入院となってしまいました。入院中、食事が自力摂取できず、歩行も困難な状態となり車椅子での生活になってしまいました。入浴もストレッチャー浴であれば拒否なく可能になったものの、グループホームにはストレッチャー浴がなく対応可能な特別養護老人ホームへ住み替えとなりました。

《まとめ》

住み替え当日に旦那様がグループホームに来てくださり、「無事退院出来ました。グループホームの職員さんがいつも明るく接してくれたから、、本当にありがとうございました。」と涙を浮かべ、言葉を詰まらせながら話して下さいました。

全員で力を合わせたチーム力。介護は正解のない仕事ですが、旦那様と一緒に乗り越えようとしてきた日々が間違っていなかったのだと確信しました。

家族の協力を得て、家族とチームになる事が、利用者の生活や行動に結果として表れることを今回の事例を通して強く感じました。

当たり前の生活を当たり前、これからも。



「一人は寂しいよ・・・」
～安心できる場所を求めて～

スーパーデイようざん栗崎
渡辺恵美
植原さおり

【はじめに】

適応障害を持つ認知症の利用者様が、被害妄想やその他の周辺症状に苦しみ、デイサービスの利用ができなかった。被害妄想・混同・混乱・不穏・不安などによる身体へ及ぼす変調が体調の悪化へとつながり、来苑したいと思いつつも来苑することができない状況乗り越え、デイサービスの定期利用を実現できた事例を紹介する。

【利用者様紹介】

氏名:A様 性別:男性 年齢:89歳

要介護度:要介護1

病名:アルツハイマー型認知症・適応障害(対人障害)

周辺症状:被害妄想・作話・不穏・帰宅願望

服薬:ルネスタ錠 2mg・メモリー錠 5mg・テトラミド錠 10mg・レサルティ錠 1mg

アリセプトD錠 5mg・スルピリド錠 50mg・センノシド錠 12mg・リスペリドン内容液分包 0.5mg

性格:穏やか、口数が少ない

家族構成:妻・娘(主介護者)

【出会い】

令和元年11月担当者会議の席でA様と出会った。被害妄想が激しくなった事により、それまで利用していたデイサービスの利用が出来なくなり、閉じこもり状態になっていた。また、訪問看護の担当看護師・ケアマネジャーの交代も同時期にあり、心身共に不安定な状況がより一層深まっていた。

そんな中、認知症専門の柔軟な対応のできる認知症対応型デイサービスを利用したいとの相談から、12月1日、スーパーデイようざん栗崎の利用へとつながった。

【利用当初】

ケアプランでは、月・水・金の週3回、朝10時頃から15時半頃帰宅で開始となった。利用を開始してみると、予定通りの時間を過ごせたのは初めの1週目の月・水・金の3日間のみだった。

その後、我慢の限界を超えてしまったかのように、来苑しても1～2時間経つうちに被害妄想や

頭部の火照りが激しくなる等の身体症状が出てしまい、落ち着いていることが出来なくなった。さらに帰宅願望が強くなり「帰りたい、帰らせてくれ」と頻回に訴え、帰宅せざるを得ない状況になることが4日ほど続いた。

その後は、閉じこもりがちになり利用できない日々が始まった。

周辺症状が激しくなりだしてからは、担当の訪問看護師と連携を図り、体調の不安を相談し、どのような対応をすれば安心して穏やかに過ごせるか、毎回アドバイスを受けた。また当施設の機能訓練士は看護師でもある為、看護師を信頼している A 様の相談役となり、身体状況の相談を受けた。

しかし、A 様の精神状態の安定につなげることは出来ず、被害妄想と不安と体調不良の日々が続いた。介護者である娘さんからは、「体調不良の為、今日は利用を中止します」と毎回電話連絡があった。

【訪問開始】

A 様の休みが続いている現在の利用状況を打開する為に、1 月中旬にカンファレンスを行った。“行かないやいけない”という A 様の心理的な負担と、毎回休みの連絡をするというご家族の負担を考え、利用する時だけ連絡して頂くことにした。そして毎週金曜日、午前9時半～10時の間に自宅訪問をすることにした。定期的に訪問を行うことにより、A 様が信頼し安心できる関係を構築することを目標とした。また訪問時、家族(妻・娘)の想いや悩みを傾聴し、寄り添える関係を目指した。A 様は対人障害もある為、慣れるまで専属のスタッフを決め、全ての窓口となり対応した。不安感や申し訳ないという気持ち強い A 様に合わせ“近くまで来たついでに顔を見に寄った”というスタンスで、時間も5分程の短時間でいき、とにかく A 様の気持ちに寄り添えるよう対応していった。

訪問時は、ユマニチュード・パーソンセンタードケア・バリデーションなど介護の技法を用いて接することも心掛けた。手を握る・握手をする・肩に手を当てるなどさりげなく触れながら安心できる声掛けや「無理なくいいんですよ」「来たくなった時にいつでも来てください」「調子の悪い時は気兼ねせずゆっくり休んでください」などと短い会話を重ねた。

家族には自宅での様子や出来事など、些細な変化を聞き取りながら、その都度変化に対応した。

【経過】

訪問を始めて 2・3・4 月と3ヶ月が経過した。その間、2 月は自宅で転倒し手を怪我した為、看護師に診てもらおうという名目で3回来苑出来た。3 月は1回来苑出来たが、いずれも被害妄想や帰宅願望が激しく短時間利用で帰宅した。家族は自宅で一人にしておく事が心配で、何とかデイサービスに行きたくて欲しいという要望があり、A 様も「行かなくて申し訳ない」「何とか行きたいと思っているが行けない」と訴え、苦しんでいる様子が伺えた。4 月は1回も利用が無かった。A 様の様子が被害妄想・不穏・不安の他、疑心暗鬼・一人で出歩くなど症状が悪化しており、娘・妻・近隣に住む親戚の叔母や叔父・長男など、縁故者総動員で見守りを行っている状態であった。

【変化】

A 様の状態が悪化していることについて、スタッフ間で再度カンファレンスを行った。訪問は継続し、対人障害がある A 様がデイに来やすくなるよう、利用者が少ない日曜日に利用することも提案した。しかし 5 月に入っても、便秘による苦痛の訴えがあったり、前日の夜は行く気であっても当日の朝になると「やっぱりダメだ。」と来苑出来ないことが続いた。そんな A 様が 5 月の末の訪問時、「一人は寂しいよ…」とぼろっとこぼされる事があった。それは A 様の素直な気持ちであり、スタッフに心を開かれた瞬間でもあった。

その日を境に A 様がデイに来苑される日が増えてきた。

【役割の獲得】

6 月からは平均週3回利用が出来るようになってきた。A 様は畑仕事が得意で、スタッフにアドバイスをしたり、他の利用者様と一緒に畑作業を楽しむ事も出来た。畑仕事という役割を獲得したことにより、デイで自らの存在価値を見出す事が出来たのである。来所時はスタッフが終日付いて個別対応を行っているが、予定通り 9 時から 15 時半まで利用出来る日も増えてきた。表情も以前は見られなかった柔らかく穏やかな笑顔が見られる事が多くなっている。

また、利用中に 2 日続けて排便をすることが出来た。便秘による体調不良で悩んでいる A 様にとって、この事もデイが“安心できる場所”と印象づける大きな出来事であった。翌日も「ようざんに行くくと便が出て調子が良いから、今日も行くよ！」と来苑された。

A 様の利用は体調不良による休みや、短時間で帰宅になる日もあるが、翌日に振替利用されることで長期休みにならず、今も利用が継続できている。

【結果】

- ・便秘による周辺症状(被害妄想・不安・疑心暗鬼・猜疑心)
- ・適応障害(対人障害・特定の人にこだわる・うつ)
- ・帰宅願望

などの課題に対して、実践の中から解決策を試みる事ができた。

【考察】

12 月に利用を開始してから休みがちで、短時間利用しか出来なかった A 様が、半年後に何故利用が出来るようになったのか。きっかけはやはり、「一人は寂しいよ…」とスタッフに打ち明けてくれた事だと考えられる。訪問を繰り返し、スタッフと顔見知りになり、心情を吐露してくれるようになるまで半年という時間は必要な時間だった。それは、不安感が強く、対人障害などの適応障害で悩む A 様から信頼を得る為の期間ともいえる。A 様からの信頼を得て、デイサービスが“安心できる場所”と思えるようになった理由として、“行かないといけない場所”というプレッシャーから“行きたいときに気軽に行ける場所”に認識が変わった為と思われる。この認識も、訪問時「来たくなった時に、いつでも来てください。」と繰り返し伝え、励ましていた事が A 様の不安の一つを取り除いた。もう一つの

理由はデイサービスのトイレで排便が出来た事である。A 様にとって、便秘は体調不良の原因であり、不安の根源でもある。A 様自身も「ここはトイレが近くに複数あって良いね。」「トイレを気兼ね無く、ゆっくり使える。」「すぐに行けるから、安心して来れるよ。」と発言をしている。

また、畑仕事という役割との出会いも A 様の来所への想いを前向きにさせた。元々、畑仕事は実家でよくしていたそうで、畑の事を聞くと普段は口数の少ない静かな A 様が、次から次に畑の話をして止まらなくなる。娘さんからも「デイで畑仕事をしている事は通い続けられる良い刺激になっているようです。」との言葉を頂いた。

A 様から得た信頼と、ようざんへの安心感を持ち続けて頂くことが、今後の利用に重要となる。例えば精神的に不安定になって帰宅願望が出たり、体調不良があった場合などに無理して引き止めず、A 様の意志を尊重し希望通りに帰宅して頂くなどである。A 様のデイサービスへの期待を裏切らず、信頼関係を高めていく事が、A 様の精神的安定にも繋がっていく。

【まとめ】

A 様は適応障害・認知症の様々な周辺症状により、悩み・苦しんでいた。周囲のサポートが必要にも関わらず、なかなか人から理解されず、その事で更に苦しむことになる。A 様の事例を通して、その人のペースを大事にして、寄り添うケアの大切さを改めて学ぶことが出来た。人を理解するという事。その為には、まず何をすべきかを真剣に考え、行動する事がその人に近づく為の第一歩だと感じた。介護者の行動一つで利用者様の世界を閉じる事もあれば、広げる事も出来る。だからこそ、私達は責任を持って利用者様と向き合わなければならない。これからも利用者様の状況・状態・思いに寄り添ったケアを行い、安心を感じて頂きたい。ようざんに来る事に慣れてきた頃、A 様が「今が一番良い時だよ。」と言った。あの時の穏やかな笑顔が今も心に残っている。



どこに行くのか分からないけど、まあいっか！」

スーパーデイようざん石原

石井洋子

<はじめに>

レクリエーション中「ワハハハ！」と豪快で、ひときわ楽しそうに笑われている。

他の利用者様の服装や制作の様子を見て「素敵なスカーフですね！」「上手に出来ていらっしやる」等と、相手を立てて褒められる。職員に対しても「悪いですね。全く私は、ろくなもんじゃなから！ワハハハ！」と冗談を交えながら楽しい会話をして下さる。A様が笑われると、私達までつられて笑ってしまいます。

しかし10ヶ月程前までは、お迎えに何うと布団から顔だけ出して「誰？」「何ですか？そんなところ行きませんよ！」「誰もそんなこと頼んでません！」「はい、おしまーい」と、けんもほろろに来苑拒否。どうにかこうにか奇跡的に来苑出来たとしても、終始不機嫌で「冗談じゃない！」「気持ちが悪い！帰りますから！」を連呼されている。レクリエーションや慰問にも参加されず、参加されている人達を見て「バカじゃないの？」と見下し、侮辱する仕草をされる。食事や水分についても「まずい！」と言って、殆ど摂取されない。

このように当初は頑なに心を開かず、誰とも交わろうとされなかったA様に対して、戸惑いながらも諦めず、関わり続けたことで変化が現れた事例を紹介致します。

<利用者様紹介>

氏名：A様

性別：女性

年齢：88歳

介護度：要介護3

既往歴：アルツハイマー型認知症、高血圧症、脂質異常症、不眠症、骨粗鬆症

<生活歴及び利用の経緯>

学校卒業後は、家業の染物工場のお手伝いをされていました。20代半ばで取引先の呉服問屋に勤められていたご主人と結婚され、実家の隣に新居を構えました。まもなく授かった息子さんへの教育を大変熱心にされ、見事有名大学に合格されています。子育てが一段落すると、若い頃から続けていた華道と茶道の師範の資格を取得し、ご自宅で教室を開いていました。その他にも書道や絵画、お箏や三味線にも造詣が深く、それぞれの道を究めるべく、常にご自身も学んでおられたそうです。また地元デパートにもお勤めをされ、婦人服売り場で接客をされていました。その為か、普段からおしゃれも大好きで、今も決してズボンには穿かず、長い髪にロングスカートがトレード

マークです。ご主人曰く「見栄っ張りで負けず嫌い。でも裏を返せば、とても勉強熱心で頑張り屋。やり始めた事は最後までやり遂げる。

他人に頼らず何でも出来る、強くて華やかで社交的だった」そうです。

そんなA様でしたが、10年程前から徐々に会話や行動に認知症状が現れ始めました。それでもご主人が仕事をしながら身の回りの世話をし、二人で生活を続けていました。

しかし令和元年5月に、ご主人が大腿骨を骨折し入院されたことで独居状態となり、遠方に住まれ、週に1、2回しか帰省することが出来ない息子さんが、A様の様子をご覧になり「独りでは生活出来ないなあ」と心配され、6月からスーパーデイようざん石原をご利用頂くことになりました。

<利用当初の様子>

まずは体験利用からとなり、当日の朝に職員がお迎えに伺うと冒頭に記した来苑拒否があり断念。息子さんの帰省日に合わせて体験日を設定させて頂いていたこともあり、息子さんに状況を報告して午後に改めて息子さんご夫婦と一緒に来苑して頂き、入浴だけして帰宅されることになりました。その際にもコミュニケーションを図る為に職員から「困っていることは無いですか？」とお聞きすると「困っていることなんか何もないから大丈夫です！」とキッパリと答えられ、警戒し他者の介入を強く拒んでいる様子が窺えました。その後も度々来苑拒否があり、何とか奇跡的に来苑されたとしても終始不機嫌で、誰とも交わらず自分で何でも出来るとの思い込みから、全てにおいて強い拒否と否定がありました。

8月には体調不良(意識喪失)で救急搬送となりました。脱水症で本来入院を要しましたが、意識が戻ると状況判断が出来ず、混乱して点滴を抜いてしまった為に、家に帰されてしまいました。この一件に加えここまで大きな進展も無い心苦しさと、持病と暑さからの体調不良の再発の懸念もあり、一刻も早く継続的にご利用して頂かなければと気持ちは焦るばかりでした。

そこで私達は課題を抽出し、それに対する取り組みを考え実践することにしました。

<課題と取り組み>

- ・課題① →警戒心を解き、信頼関係を構築する。
- ・取り組み →まずは安心と信頼関係を構築する為に決して押しつけや強引なことはせず、穏やかに、時にはユーモアを交えて根気強く携わりました。お迎えも来苑拒否があれば、日によっては職員が交代で何度も伺うこともありました。具合が悪そうだったり、困っていそうならば「良かったら飲んで下さいね」と伝えて水を置いてくる等、職員の顔や名前は認識出来なくても事業所の制服を見て“緑色の服を着た人は悪い人ではない”ことを認識して頂くことに努めました。

また、それまでは、「息子さんに頼まれて」を多用しがちだったお誘いの文言も、ある日何気なく「息子さんが病院で待っていて、迎えに行けないから連れて来て欲しいと頼まれたので、一緒に行きましょう」とお誘いしてみたところ、ブツブツ言われながらも、これまでよりも格段スムーズにお連れ出しが出来たので、以降はこの誘い方

で統一することにしました。

- ・課題② →食事と水分の摂取不足及び薬の管理と服用が出来ていないことによる体調不良。
- ・取り組み →血圧の薬を始めとする薬の飲み忘れや飲み過ぎを防ぐ為に、定期巡回事業所とも連携して、薬はご本人の目の届かない場所に変更し、自宅分については定期巡回事業所で配薬と服用を行い、デイご利用日の朝と昼分は、デイサービスで管理し服用することにしました。食事や水分についても、途中で摂取を止めてしまおうとしても、急かさず穏やかにお勧めして、少しでも多く摂取して頂けるように努めました。

- ・課題③ →自分で何でも出来るとの強い思い込みからの介護拒否。
- ・取り組み →出来ることについては「お願い出来ますか？」と笑顔でお願いし、例えそれが不完全であったとしても、お礼と称賛の言葉を掛けました。また、拭ききれない・洗えない等の不完全な部分については、「ちょっとお手伝いさせて頂いてもよろしいですか？申し訳ないですね」とお断りをして自尊心を損なわないように配慮しました。例えご本人が怒っていたとしても、視線を同じ高さに合わせて、必ず笑顔で話し掛けることを徹底しました。

- ・課題④ →他者と交わろうとされない。
- ・取り組み →当初は他の利用者様に対しての言動を考慮して、少し離れた静かな席にしていました。しかし、これではトラブルは回避出来てもいつまで経っても他の利用者様との交流が出来ず、デイサービス本来の楽しさも伝わりません。そこであえて相席にして職員が仲立ちをすることで、他の利用者様ともコミュニケーションが取れるようにしました。

<結果と現在の様子>

今でもお迎えに伺うと相変わらず布団の中ですが、職員が「息子さんが病院で待っているのだから結構です！」と頑なだった介護拒否も無くなり「いろいろして頂いて、ありがとうございます。ここはみんな善い人だもんね！」「私、ここが好きよ」とおっしゃって下さいます。

また、以前は「バカじゃないの？」と他者を見下す言動があったレクリエーションにも他の利用者様とコミュニケーションを取りながら、楽しそうに参加されています。体調についても薬の服用がきちんと出来たことで、血圧が安定して気分が落ち着かれた為か、食事や水分も摂取出来るようになり、体力がつき活動性も上がりました。更に最近では食欲も出てきて職員がお勧めしなくても「じゃんじゃん食べちゃおっと！」とおしゃりながら食事をされる「良い事の連鎖」も見られています。9月には入院をされていたご主人が退院されたことも安心感に繋がり、心身共にとても安定されています。

<まとめ・考察>

認知症の方の怒りは、言いたいことが上手く言えない苛立ちや不安の表れだと言われています。私達もある日突然、見知らぬ人が家に来て「出掛けましょう！」と言われたら驚き、不安や恐怖を感じるはずですから、認知症の方なら尚更だと思います。でも私達なら訪問者とコミュニケーションを図り、情報を得て確認することが出来ますが、認知症の方には、それも困難です。「知りません！」「困っていません！」「行きません！」「結構です！」と怒鳴られ拒否されても、とにかく何度でも足を運んで声を掛けることで、この人達は悪い人では無いと安心され、徐々にではありますが信頼関係の構築に繋がり、危機的な状況から脱することが出来ました。

今回も諦めないことの大切さや信頼関係の構築の難しさを再認識すると共に、気持ちが伝わり継続的なご利用に繋がった喜びを実感出来た事例を経験することが出来ました。

「おはようございま～す！ようざんで～す！一緒に出掛けましょう！」

「どこに行くのか分からないけど、まあいっか！（ワハハハ）」



安心して暮らせる環境を
～お金がないからいいよ～

ケアサポートセンターようざん
塚越 涼介

○はじめに

突然ですが皆様は自分の老後の生活を想像したことはありますか？ ネガティブな事を考え、不安になったりしないですか？

想像してみてください。もしも一人暮らしでお金が無かったら？ 重い病気を抱えていたら？ 認知症だったら？・・・

今回ご紹介させていただくご利用者様の A 様はこのすべてに当てはまります。しかし、それでもご自宅で暮らすことを望んでいる方です。そんな A 様が生活していく中での私達ようざんの関わり、地域の方々の協力を紹介します。

○本人紹介

氏名:A 様

性別:男性

年齢:83 歳

介護度:要介護 1

既往歴:認知症、高血圧、心筋梗塞、狭心症

○生活歴

5 人兄弟の一番目。既婚歴はなく定年まで役場で働いていました。若い頃家を飛び出している為、現在はご家族(弟)とは疎遠状態です。

定年後は自宅アパートにて一人暮らしをしています。しかし、ある理由から内服や金銭管理が困難になり、日常生活自立支援事業が管理をしていました。平日の9時頃に日常生活自立支援事業に自転車で出向き、一日の生活費として 2 千円を受け取りに行っていました。そこで内服も行っていました。その後自宅近くのスーパーに寄り一日分の食事としておにぎり 2 個を購入して、自宅に戻り食事を取っていました。

○施設利用の経緯

令和 2 年 4 月上旬 A 様は桐生に行く為に自転車で出かけたが、途中で方向が分からなくなり榛名、倉渕付近で警察に保護され、自宅アパートまで誘導してもらい帰宅。

徐々に、認知症の進行があり徘徊を繰り返すようになった為、かかりつけの西村医院を受診したところ、自宅での一人暮らしが困難と考えられ施設入所の方針となりましたが、本人の強い希望に

て在宅生活継続となりました。

4月中旬には、胸部圧迫感が出現し、再び西村医院を受診されました。心電図の結果 V2～V6 陰性 T 波が見られ、不安定狭心症との診断で高崎総合医療センターに入院、カテーテル治療を勧められるも A 様が強く拒否された為、内服治療にて保存的に経過観察を行う方針となりました。

そして4月下旬、社会福祉協議会の方から A 様の体調が悪く迎えに来て欲しいとようざんに相談の連絡がありました。社会福祉協議会の方々、日常生活自立支援事業の方々の協力のもと A 様にデイ利用を促していただき、ようざんに緊急利用となり、そこから利用開始となりました。ですが、認知症も進行しており、見当識障害も見られ、金銭管理や内服管理も出来ません。その上自宅には冷蔵庫などの生活に必要なものがない為、自宅での生活には様々な問題がありました。その問題点と取り組みについていくつか紹介させていただきます。

○A様が生活していく上での問題点と取り組みについて

・食事管理

A 様はスーパーのおにぎり 2 個で一日を過ごしていた為、低栄養状態であり体重も減少傾向だったので、まずは食事を 3 食規則正しく取っていただくことにしました。朝食は本人の楽しみでもあるスーパーでの買い物で好きなものを購入していただき、昼食と夕食はデイ利用される日にはようざんにて提供し、デイ利用されない日には配食という形をとり、職員がお弁当を持参して訪問する事にしました。しかし、ここで問題が起きました。職員がお弁当を渡そうとすると、「お金がないからいいよ」と言われるのです。A 様は今までお金で苦労してきたので強い不安を抱いているのではないかと私達は感じました。そこで私達はお弁当を渡す際には「市役所からのお弁当(食事)です。無料ですよ」と根気よく伝え続けました。すると徐々に理解してもらえるようになり、私達職員に対して安心感が生まれてきたのか、今では拒否も無くなり A 様から「コレ食べていいかい？」と聞いていただけるほどまでになりました。

・体調管理と内服管理

健康状態の把握と内服がある為、A 様がスーパーに行き、購入してきた食事が終わる 10 時に訪問し、バイタルチェックと朝食後の内服をしていただきます。昼、夕の訪問時も 10 時の訪問同様です。また胸の痛みや苦しさなど何か異常があった場合には、すぐに看護師に連絡し、状態によっては担当医に連絡して指示を仰ぐ体制をとっています。

・清潔保持と入浴

洋服は毎日同じ服を着ており、以前は公衆浴場を利用していたとのことですが、現在自宅の浴室も使用できる状態ではなく入浴されていない様子でしたので、デイ利用日には入浴もしていただくことにしました。入浴も食事同様に「お金がないからいいよ」「お風呂はいいや」と拒否が見られましたが、時間を空けて再度声掛けをする際に「お風呂は無料ですよ」と伝えると「無料なら入るよ」と入浴していただけるようになりました。

洗濯に関しては自宅で洗濯されていたとのことですが、現在はしている様子はないので洋服は、ようざんで預かり洗濯して、その日の天候や気温に適した物を着ていただいています。その他、布

団乾燥消毒サービスの利用や A 様がデイ利用時に自宅に訪問して部屋の掃除も行っています。

・金銭管理とお金への不安の解決

A 様は認知機能が著しく低下しており、金銭管理が出来ません。また判断力も低下しており、民生委員の方々や同アパートの住民の話によると、知人よりブロックで叩かれ暴力を受けたり、金銭搾取をされているとのことでした。この経緯から A 様がお金に対しての不安があるのだと私達は考えました。そこで私達は区長さんや民生委員の方々と協力し合って、私達が訪問に行く時間帯以外の時間に訪問をお願いし、A 様が一人でいる時間を少なくして暴力や金銭搾取を防止しようと考えたのです。また私達が訪問時に何か出来ることはないか、職員同士で話し合った結果、訪問時に A 様の上承を得てから目の前で財布の中の金額とレシートを確認、A 様が日常生活自立支援事業で受け取ってくるお金を私達が管理し、財布には 2 千円以上入れないようにしました。当然最初はバッグや財布の中身を私たちが確認することを A 様は不信に思い、確認させていただけませんでした。しかし、「お金を預かってきたから財布に入れますね」などの声掛けを行い、中身の確認が出来る様になりました。そういった私達の取り組みや地域の方々の協力もあり、今では知人による暴力や金銭搾取を防止することが出来ています。

○まとめ

今回紹介させて頂きました A 様は、現在は週 2 回のデイ利用と地域の方々の協力を最大限に活用され、無事にご自宅で生活されています。また利用開始当初の A 様は不安な表情をしていましたが、今は笑顔を見せて下さることが増えてきたように思います。地域みんなで支えていくことで A 様が生活しやすい環境になったのだと思います。しかし認知機能の低下が著しく、狭心症も徐々に進行してきています。もしかしたらまたお金や病気、知人の事など、不安を訴えることがあるかもしれません。ですが A 様はこの先も自宅で暮らすことを強く望んでいます。これからも私達をはじめ、地域の方々、社会福祉協議会の方々などと協力し合いながら、A 様が安心して暮らしていけるようにしていきたいです。

この場を借りて今まで協力して下さった皆様、本当にありがとうございます。

そしてこれからもご協力よろしくお願いたします。



「看取り」

ご本人と家族の想いに寄り添うために

グループホームようざん飯塚

木下 圭太

郷本 ギア

はじめに

現在の認知症対応型共同生活介護『グループホーム』は、制度化された1997年当初に比べて、入居者の要介護度も重度化しており、時代の流れで認知症にまつわるケアのみならず、重い症状に対する医療処置や看取りの支援も求められています。今回私たちは、終末期であるとの診断を受けないうちに状態が短期間で変化された、3名の利用者様を見送ることとなりました。

看取りの経験も少なく、普段はあまり意識していなかった『近い将来、死が避けられないかもしれない』という不安の中、「利用者様にとって何が必要なのだろうか。自分たちにできることはなんだろうか」と考えながら行った取り組みと、今回経験したことを次に活かすためにはどうしたらよいか、と検討したことを発表します。

1: 事例対象者様

A様 享年93歳 女性 要介護度4 老衰により死去

ご利用期間・平成26年7月から令和2年1月 5年6か月

A様はYES・NOの意思表示はできましたが、失語があり明確な意思表示や訴え、周囲と正確なコミュニケーションをとることは困難でした。いつも笑顔で職員に話しかけてくださり、手を握ったりスキンシップもお好きな方でした。

【ご家族の意向】 延命治療は行いません。食べたり飲んだりができなくなったら、そのまま静かに過ごして欲しい。

【看取りまでの経緯】 主治医に食事量、水分量が減っている旨相談し、身体の状態は落ちているとの診断を受けていました。往診1週間後の早朝、夜勤者が巡視に行った際、呼吸をされていなかったためご家族に連絡。家族の意向で緊急搬送を行い、老衰にて死亡との診断を受けました。その後帰苑され、職員、ご利用者様に見送られご家族と一緒に苑を出られました。

B様 享年99歳 男性 要介護度4 老衰により死去

ご利用期間・平成27年11月から令和2年1月 4年3か月

B様は甘いものがお好きで、好きなものはよく召し上がられていました。やりたいこと、やりたくないことは表情や行動でわかるものの、言葉での意思表示はほとんどできませんでした。介助がな

いと生活ができない状態でしたが、隣に座ると、よく職員の手を握っていただきました。

【ご家族の意向】 ここで最期を迎えたいとのご家族からの希望あり。本人らしく、食べたいものを食べて、穏やかに好きなように過ごして欲しい。面会に来て、歩いている姿を見ると、本当にうれしい。

【看取りまでの経緯】 食事、水分が摂れなくなり、立つこともままならなくなってきたため主治医に随時電話で相談。主治医より、「いつどうなってもおかしくないから、家族には連絡してください」とのことで、ご家族に連絡しました。バイタル測定を3時間ごとに行い、ベッドに横になってもらって体を休めてあげて下さいとの指示があり居室にて過ごしていただいていた。主治医の往診後約1週間後の夕方、バイタル測定中に呼吸が弱まり、その後停止。主治医、ご家族に連絡し、その後主治医が来苑され、死亡確認。老衰にて死亡との診断を受けました。職員、ご利用者様に見送られ、ご家族とともに苑を出られました。

C 様 享年 98 歳 男性 要介護度 5 老衰により死去

ご利用期間・平成 26 年 10 月から令和 2 年 2 月 5 年 4 か月

C 様は意思表示ができる方でしたが、我慢強く、自分から苦痛や希望を訴えられることはほとんどありませんでした。歌とコーヒーがお好きで、亡くなる数日前までコーヒーを飲まれ、一緒に歌を歌って下さいました。物静かですが、人と話をするのはお好きでした。

【ご家族の意向】 きっとここで最期を迎えるのだろうと思っていますが、その時になってみないと考えられない。延命治療などをするつもりは今のところないのだけれど。

【看取りまでの経緯】 急に、食事、水分が摂れなくなり、発熱等は見られませんでした。体を休めていただくため、居室でベッド対応を行いました。主治医に連絡をし、安静の指示を受けました。ご家族にも状態の連絡をしました。食事が摂れなくなって3日目の深夜、下顎呼吸が始まったため、すぐにご家族に連絡をし、ご家族の希望により緊急搬送となりました。その後病院で老衰にて死亡との診断を受けました。

2:職員で検討しあったこと

- ・下顎呼吸や頻脈、血圧低下など終末期に現れやすい兆候について勉強会を行う
- ・万が一の時の為に、主治医や家族などにすぐに連絡できるよう連絡シートを用意する
- ・利用者様の肉体的、精神的苦痛を和らげ、不安を取り除くために出来ることはなにか、個人に合わせて検討する

3:事業所で行ったご利用者様へのケア

- ・職員全員で主治医からの指示と現在の状態の情報共有を行う。
- ・主治医の緊急連絡先をうかがい、緊急時以外はメールで状態を伝え、指示を受ける。
- ・全職員がやるべきことを共有できるよう、1時間ごとに記入が出来るチェック表を作りケアを行う。(保湿・髭剃りや顔を拭くなどの整容・除圧・加湿・水分補給・パット交換・清拭・バイタル測定)
- ・利用者様の好きな歌を歌ったり、手を握って声をかけたり身体をさするなど、そばにいることを伝え安心していただく

4:今後の課題

- ・グループホームは24時間看護師が常駐しておらず、医療面が弱いため、医療との連携の仕方を工夫する(メールや電話や普段の関わり)
- ・入所施設のためご家族と接することも少なく、看取りの際の家族への支援の仕方が確立できていない
- ・ターミナル期の介護方法や技術を学ぶ

まとめ

3名のご利用者様をお見送りし、ご家族の方からは「ここで生活できて本当によかった」「皆さんがいたから寂しくなかったね」「良くしていただいてありがとうございます」「あなたに最後を看取ってもらえてよかった。」など、本当にたくさんの温かい言葉を頂きました。

きれいなものが好きな A 様の為にお好きだったピンクの花を持って、苑全員でお見送りをさせていただきました。大輪の薔薇の花を見て、「ああきれいだ」としみじみとおっしゃった B 様の言葉が忘れられず、薔薇の花を飾らせていただきました。お孫様からは、「おじいちゃんとても幸せそうだったから、ここでのおじいちゃん的生活を、職員さんにぜひ聞かせてほしい」とお願いされました。

C 様のご家族からは、「あなたが夜勤の時に旅立ちたかったんだね。あなたで本当に良かった」と言っていました。

それと同時に、あらためて「私たちのケアは利用者様にとって、本当によかったのだろうか。」「他にもっとできることがあったのではないだろうか。」「ご家族にもっと早く状態を伝えるべきだったのではないだろうか」という思いも残ります。

高齢者の介護に携わる職員として、私たちの判断や行動がその人の命にも影響を与えるのだという緊張感を持って接していかななくてはなりません。

グループホームという24時間365日、常に利用者様に寄り添うことが出来る環境だからこ

そ、わかることやできることがまだまだたくさんあるはずです。

この経験を決して無駄にすることなく、最後まで利用者様らしい人生が送れるように、ここで生活できて本当によかったとっていただけるような介護を目指して行きたいと思います。

最後に

私たちは、静かに旅立たれたご利用者様に心からの感謝の気持ちを伝えたいと思います。

ここで生活していただきありがとうございました

ここでの生活は、幸せでしたか？



「最後まで自分らしく暮らしたい」

ナーシングホームようざん
木村リア・パディリア
藤田 暁子

<はじめに>

私達は自分の住み慣れた町で、家族や友人に囲まれて暮らし、地域に密着したやり方で利用者様のニーズに答え、心身共に健康で充実した日常生活を過ごして頂くことを目的としています。現在ナーシングホームようざんでは、30名の方が入居されています。その中でも、ホールへ来られても、話し相手となる方が少なく、居室にこもってしまうA様がいます。ただ、無理にホールで過ごし時間をつぶすのは、本人の望む事ではなく、楽しみを持って快適に過ごす事が出来ないか？と検討した結果、A様が望んでいることを探り、楽しみは何かを見つけたいと思い今回のテーマにしました。途中経過ではありますが、ケアに対する取り組みについて発表します。

<利用者様紹介>

対象者:A様 男性 83歳 要介護1
性別:男性
年齢:83歳
既往歴:9年前に小脳梗塞発症
:令和元年高血圧、認知症と診断を受ける

<生活歴>

結婚歴なし。実家が資産家であったが、父親から引き継いだものを浪費や事業失敗で全て無くしてしまった。しかし、育ちのせいなのかお金が無くても全く心配せず、無いなら無いなりに生活し、たとえライフラインを止められても気にしない。自宅はごみ屋敷状態で人が住める状況ではなかったが、勉学に励むことは好きであり、読書家で昔から小説家を夢見ていた。子供好きでもあり近所の子供を集めては登山や旅行など連れて行ったりと面倒を見ていた。妹は横浜にいるが一切関わりをもっていない。9年前に小脳梗塞で入院していたが、退院となった後は病院にも受診せず服薬もしていなかった。

令和元年6月、お金も無くともに食事をとれず、外で歩行できず倒れている所を近所の方に発見され、救急車で病院に搬送され、高血圧の治療目的にて入院となる。血圧は150～220と高めだったが、ADLは自立していた為、治療は内服薬中心で行っており、薬のコントロールもうまくいき血圧も安定し自覚症状もなく退院の運びとなる。しかし、独居の為生活するのは困難であり、当施設に相談があり令和元年7月に入所となる。

<経過>

入所当初、他の利用者様とのコミュニケーションが上手く取れず、几帳面な性格もあって、孤立されている事が多く、他の利用者様に溶け込めないで一日を過ごされていた。原因として、施設入所するまでは、ひとりで気ままに自由奔放に過ごしてきた事や、他の利用者様は、重介護の方や認知症の方が多く事などが考えられた。スタッフもどのようにアプローチして良いのかわからずにいた。そんな日々を送っている中で、A様の笑顔を見る一瞬があることに気付いた。同じテーブルの利用者様の家族の方が、面会に来た際、普段趣味で行っている登山の写真を見せてもらった時に浮かべたその笑顔を見て、私達は気が付いた。A様は、孤独を楽しんでいるのではない、まだまだ、自分の好きなことをやりたいんだと！

<取り組み>

スタッフより本人の趣味である登山へ！一緒に行けないかと所長に提案する

↓

登山好きな利用者様の家族に相談すると崇台山が良いと勧められる。登山に関しては初心者コースで登りやすく、展望が素晴らしいため、群馬県の中にある497の山の中から「ぐんま百名山」のひとつにも数えられる山となっている。四方に群馬の山々が美しく見える山でありおすすめとの事。A様に宗台山へ登山へ出かける提案を行うと会話が弾み、頭の中は登山の事ばかりで、早速登山ができる靴を買いに行きたいと、希望を口に「形から入るのが良い」と嬉しそうに話される。

↓

実際行ってみる。少し息切れも見られるが、表情も大変充実されている。帰苑後には、次はどこに行こうかと会話が弾み、他の利用者様の家族とも今まで以上に仲良くなり、会話も盛り上がり、これを機にナーシングホーム登山部が発足した。

↓

その後は皆で楽しく歩ける場所を探し、距離も遠くない場所を探す事も楽しみになり、A様からの提案で観音山の裏にある、つり橋からみる景色が良いとの話になり、観音山へ行くことになった。その頃より、体の傾きなどが見られる様になってきた。

↓

その後は、持ち回りで提案する事になったが、本人の強い要望もあって、昔よく行った少林山へ行きたいとの事でそちらに赴いた。

↓

続いては、寒桜で有名な場所があるとスタッフから聞き、甘楽総合公園へ足を運ぶこととなった。その時には、A様から、他の利用者様に一緒に行こうと声を掛け、体力をつけないと駄目だと前向きな発言も多く聞かれるようになった。

<考察>

今回の課題を通して職員が一人の利用者様にしっかり目を向ける事により、A様にも変化が見られ、

自然な笑顔を見る事ができ楽しむ姿が見られるようになりました。今では自分から他の利用者様に寄り添い、コミュニケーションを図り、笑顔が溢れ『やる気、活力』を引き出すという良い効果が得られた事がわかりました。しかし、体力低下、ふらつき等もあって、登山に出掛ける際はそばから離れる事ができず、無理はさせられないため、その様な状態でいかに登山を行うかという事が今後の課題です。今回の取り組みで注目すべき点は、施設に入所しても好きな登山が出来、とても楽しそうな表情を見せてくれたという事です。本人から、季節によって山の景色も変わるので、春・夏・秋・冬にはこれからも引き続き一緒に行ってほしいと要望がありました。これは、レクリエーション的な楽しみを求める以外に、A 様自身の、元気で楽しく過ごしたいという思いの表れです。今では毎日欠かさず、居室で腹筋・腕立て伏せを行い、体力作りをされており、心身の向上といった効果も得られていると思います。私たち職員と一緒に何かをする事で、A 様の“笑顔”“やる気”“楽しむ気持ち”を引き出し、喜びや充実感を味わっていただく事ができると考え今では、職員も一緒に筋トレに励んで A 様自身が目標を持つことが、意欲の向上、更には身体機能の向上にも繋がります。

最後になりますが A 様は自分史を書き、半生を文章化し、自分の歴史を本に残されています。今回の取り組みから、ご自身の望む生活に寄り添うことは、精神機能だけでなく身体機能にもプラスの効果をもたらす事が判明しました。そして、効果を上げる為には双方への働きかけが必要であり、今後も利用者様の声が重要な手掛かりになると考えました。

<まとめ>

より良いサービスを提供するにはその方の事を良く知り、今の姿を見るのではなく、過去の生活背景をよく知った上で、その方の声に耳を傾けその声をサービスにつなげていくことが重要であると認識しました。

お一人お一人に寄り添ってご自身が望む生活にどのように近づけていくかを考え、心のこもった温もりのあるサービスを目指し業務に励みたいと思います。

YOUZAN
PHOTO CONTEST
2020



令和のピカピカ一年生。
わたしの昭和の二年生。



美味いおやつを作るぞ～
エイエイオー!!



お寿司は続くよどこまでも!

いつだって**繋**がってる。

